

スペイン語におけるSEを用いた受動表現

Expresión de la voz pasiva con “se” en español

三木一郎

Ichiro MIKI

0. スペイン語に於ける受動表現は最も使用頻度の高いものの一つであり、かつその使用範囲は拡大を続けている。本稿では「se」を伴った用法に焦点を合わせ、他の受動表現との関連を交えながら構文的に議論の別れる点、今後の問題点を整理する。

1. 歴史的考察

ラテン語においても受身というのは、特に会話において決して一般的なものでなく、能動態の方がより好んで使われており、そして俗ラテン語期には“littera scribitur”のような形の受動態は序々にその姿を消し、それに替って littera se scribit のように se を用いた受身が現われはじめた。スペイン語においてもこの se を用いた受身は“Non se fase assí el mercado (Mio Cid), “Estos duelos en gozo se tornaron. (Mid Cid) などのように起源時代からあったことが明らかである。以後この用法は使用範囲を広げ15世紀を過ぎると Ser + p.p. 形の受身に対して優勢を占めるようになった。下記の表は16世紀の劇作家トレス・ナアロの作品に表われる用法の分析の一部であるが、この時代には se を用いた用法が定着していたことがうかがえる。

Ser + participio pasivo	83	21.2 %
Pasiva refleja con SE	308	78.8 %
TOTAL	391	100.0 %

(Torres Naharro)

そして別の意味で Ser + p.p. の受身は、表現的優雅さに欠けるため、Se を用いた受身はさらにその使用範囲を広げていくことになる。このような過程をふまえて次のような公式が定着してきた。

- Sujeto + verbo en forma activa + objeto.
= Objeto + ser + participio pasivo + sujeto.
= SE + verbo en forma activa (3ª persona)

すなわち、もとの能動文を目的語+Ser 動詞+過去分詞+主語の形にするとところを受身の行為者が不明であったり、明らかにする必要がない場合には再帰代名詞の se プラス動詞の三人称形を用いる形をとる。次の(1)~(3)はその典型的な例である。

- (1) Se han divulgado las noticias.
- (2) Se suspendieron las negociaciones.
- (3) Se rechazarán sus propuestas.

尚、下記の(4)~(6)までは3人称複数を用いての受身の表現形式である。つまり不特定一般の「人々」

(彼ら)を主語に想定した形で構文そのものは能動態であるが、意味上は()の中のseを用いた形と同じ意味を持っている。従って、大抵の場合は三人称複数形による受身はseを用いた再帰受動態への書換えが可能であり同等の価値を持つものと言える。

- (4) Componen paraguas. (Se componen paraguas.)
- (5) Han pedido refuerzos. (Se han pedido refuerzos.)
- (6) Han robado el coche. (Se ha robado el coche.)

次の(7)~(9)までは形としてはse+動詞+受身主語の再帰受動の形をとっているが内容は必ずしも受身ではない。このseはすべての人称代名詞に代用できる無人称受身のseと解釈できる。こうなるとこのseは本来の再帰代名詞の機能からは序々にはなれて、英語の“one,” フランス語の“on”などに相当する不特定主語の役割を果していると言える。

- (7) Se dice que hace muchos años vivía una bruja.
- (8) No se ve a nadie.
- (9) Se oyó un ruido.

次の(10)のようにスペイン語ではもう使われていないが、以前は“hombre”を用いて無人称受身を表現していた。

- (10) Mas deue ombre meter uino nueuo en odres nuevos. (sic)
(S.M. 2-20, 1260)
- (10)' Mas el vino nueuo en odres nuevos *sehá de echar*. (sic)
= ha de echarse
(S.M. 2-20, 1622)

この例文は1260年の中世スペイン語の聖書⁽¹⁾をそのまま引用したものであるが、「人は新しいブドウ酒を新しい皮袋に入れなければならない。」の中に“Ombre” (sic)の「一般に人は」という非人称受身の用法がある。この証明として1622年の聖書では(10)'のように“ombre”にかわって“sehá de echar” (= ha de echarse)とseを用いている。

現代では(11)~(13)のようにhombreの働きをするseは対格人称代名詞と共に用いられている。訳文では対格人称代名詞を主語にするため受身で訳されるが、構文としてはseが一般の「人々」と解釈できる。

- (11) Se le ofreció un empleo.
- (12) No se te entiende lo que dices.
- (13) Se me ha dicho la verdad.

2. 構文的考察

2.1 使用制限

El ladrón me robó el reloj.

S Cl V CD

* Me fue robado el reloj por el ladrón.

通常2つの補語と共に使用される動詞(robar, quitar, dar, etc.)を用いた文は関接補語を主語にとった

形で *ser + p.p.* の受身には普通できないとされている。※印のような例は言っても言えないことはないが、通常は下記のようになる。

Me robaron el reloj. (Se me robó el reloj.)

(cf. I had a pickpocket steal my purse. I had my purse stolen.)

これは一種の受身の使用制限と言える。参考までに英語との比較を述べると、英語では *be* 動詞+過去分詞のかわりに “have” という使役動詞を使って *cf.* のような使役受身にできるが、これと全く同じ用法はスペイン語にはないため不可能である。

2.2 数の一致

Se venden coches. (Coches son vendidos.)

Se vende coches. (Sujeto indefinido *SE* vende coches.)

cf. Se vende vino.

上の2つの文はどちらも同じ意味を持つものであるが、Bobes Naves, María del Carmen は、論文 “Construcciones castellanas con SE” の中で *Se venden coches* のように名詞 “coches” と動詞 *vender* の数の一致のあるものを「再帰受身」とし、一致のないものを「無人称受身」と区別できると述べている。⁽²⁾ したがって上記の2つの文は () の中のように、数の一致のあるものは、*Ser + p.p.* と同じく「車が売られる」という再帰受身であり、数の一致のないものは不特定主語の “se” が「車」を「売る」という無人称の受身と解釈できる。しかし、この方法でも *cf.* のように名詞が単数であれば、再帰受身か無人称かの区別はつかないはずである。

2つの文章を比べた場合、書き言葉としては数の一致のある方が好んで使われる。その理由は書き言葉は古典作家を手本として伝統を重んじるからである。また Real Academia も *Se venden coches* の方を用いるように勧めている。また Americo Castro などの学識者もその論文 “La pasiva refleja en español” の中で数の不一致をきびしく非難している。⁽³⁾ しかし今日では書き言葉でも、特にマスコミ関係においては、次の例のように一致のない文章が見られる。

... y en la que se evita los efectos melodramáticos.

(Nuestro Tiempo 1984, Agosto.)

Si se aplicara los criterios vigentes en los negocios, ningún banco les concedería créditos.

(Vanguardia, 1984, Feb.)

この場合、*efectos* や *criterios* はもはや受身の主語ではなく直接補語であり主語は “se” であると考えられる。上記のような文章は地域によって差もあり、まだ俗語の領域を脱していないが、再帰代名詞 *se* の発展にもなって広まりつつある段階のものと思われる。

2.3 前置詞の使用

Se obsequian las señoras. (Las señoras son obsequiadas.)

Las señoras se obsequian mutuamente.)

Se obsequia a las señoras. (Impersonal pasiva)

これらの文のように名詞が「人」の場合は、文の形から見ると () の中の上の文のごとく「夫人たちがもてなされた」と再帰受身として解釈されるのが普通であるが () の下の文のように「夫人たちがもてなし合う」と相互文にとられる可能性もある。このあいまいさを解決するために、主語が「人」

で複数の場合は前置詞“a”をつけ動詞も三人称単数にして“Se obsequia a las señoras”.という形をとっている。この前置詞“a”は Americo Castro によれば 15 世紀ごろまでに定着してきたらしいが⁽⁴⁾、Gili Gaya によると、この形が実際に定着するにはかなりの時間がかかり、スペイン黄金世紀の文学作品の中でも主語が「人」で複数の場合でさえ前置詞“a”を用いていない例が数多くあったと述べている⁽⁵⁾。しかし今日では、この前置詞の使用はほとんど定着しているので、そうなると構文自体も再帰受身ではなくなり、“a las señoras”という対格補語をとる能動態になる。この時点で se はもはや再帰代名詞ではなくなっている。この前置詞の使用も se が再帰代名詞から無人称の意味を持つようになるまでの推移に影響を及ぼしたと思われる。

3. 今後の研究テーマ

* Se dictó la sentencia por el juez. (Molina Redondo)

Molina Redondo はその著者 Usos de 《SE》の中で se を用いた受身は受身の行為者がわからなかったり、また明らかにする必要がない場合、又は意図的に隠す為に用いられるので、上記の*印の文は不適当であると述べている⁽⁶⁾。しかし、またその行為者 (Agente) が物の場合は前置詞と共に用いられるとして次のような例文をあげている。

Se cura la enfermedad con estas pastillas.

La ventana se cerró con el viento.

La goma se estira con el calor.

Se anuncia por la Casa blanca que... (El PAIS, 1984, Feb.)

これらははっきりした「人」が行為者ではなく、何がしかの原因や理由によって行為がなされた場合はその原因、理由が補語となり、前置詞によって導かれるというものである。これは“voz media”と呼ばれるもので、voz activa (能動態)と voz pasiva (受動態)の間に位置するものである。今までは se は再帰代名詞又は無人称主語と解釈してきたが、それはあくまで行為者が「人」の場合を前提として取り扱ってきたからであり、逆に「人」ではなく、「原因」、「理由」の場合もあるため、この“voz media”も受動態が呈示している多様な機能価値と関連付ければ今後の研究テーマになり得るであろう。

また、もともと再帰代名詞であった se もその固有の体系を打ち破り、統語及び意味構造を複雑なものにし新しい価値を作り出している。そしてこの se の用法は他の要素と結合したり、お互いに干渉しあったりして、さらにその使用範囲の拡大してきたので、今後ともそれに伴う新しい用法の展開にも研究の課題が残るであろう。

(註)

- (1) Real Academia Española, *Evangelio de San Marco* (Madrid, Gredos, 1971)
- (2) Bobes Naves, Naría del Carmen, “Construcciones castellanas con SE”, (*Revista Española de Lingüística* 4,2. 1974) p. 301-302 dice: “En la pasiva refleja destaca como rasgo más relevante la concordancia de número entre el Verbo y el Nombre, por lo que se ha interpretado que éste funciona como Sujeto, ya que las relaciones Verbo-Objeto no exigen una

concordancia en el número, sino sólo adecuación semántica. La forma impersonal no presenta esta concordancia porque el Nombre no se incluye en las relaciones inmediatas del Verbo.”

- (3) Amerci Castro, “La pasiva refleja en español” (Hispania I, 1918,) p. 85 dice: “Precisamente en las frases del tipo *se leen libros* se conserva pura la primitiva construcción románica que vino a actuar de voz media, voz que el indo-germánico había poseído, y para la que el latín no tuvo ya órgano morfológico; la conciencia popular siente perfectamente la concordancia en esos casos: ¿por qué pues introducir esas horribles oraciones de la clase de *se encuentra vagabundos, se lee estas frases?*”
- (4) Americo Castro, *ibid.*, p.82.
- (5) Samuel Gili Gaya, *Curso superior de sintaxis española* (Barcelona, Biblograf, 1982, 14^a ed.) p.210
- (6) J. A. de Molina Redondo, *Usos de SE* (Madrid, Sociedad general española de librería, S. A. 1974) p.25.

参考文献

- Americo Castro, “La pasiva refleja en español”, (H. 1.2, 1918)
- L. Contreras, “Significado y funciones del pronombre *SE*” (Z.R.P.H. 82, 1966)
- C. Hernández Alonso, “Del *SE* reflexivo al impersonal”, (AO. 56, 1966)
- Bobes Naves, María de Carmen, “Construcciones castellanas con *SE*”, (Revista Española de Lingüística, 4,1. y 4,2, 1974)
- E. Alarcos Llorach, “Valor de *SE*”, Estudios de gramática funcional del español, (Madrid, Gredos, 1982, 3^a ed.)
- J. A. Molina Redondo, *Usos de SE*, (Madrid, Sociedad General de la Librería, 1974)
- M. Antonia Martín Zorraquino, *Las construcciones pronominales en español*, (Madrid, Gredos, 1979)
- Samuel Gili Gaya, *Curso superior de sintaxis española*, (Barcelona 1982, 14^a ed.)
- Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, (Madrid, Espasa-calpe, 1982)
- Juan Alcina Franch, José Manuel Blecua, *Gramática española*, (Bracelona, Ariel, 1982, 3^a ed.)
- Rafael Seco, *Manual de gramática española*, (Madrid, Aguilar, 1980)
- Martín Alonso, *Gramatica del español contemporáneo*, (Madrid, 1974)
- J. Roca-Pns, *Introducción a la gramática*, (Barcelona, Teide, 1980)
- Rafael Lapesa, *Historia de la lengua española*, (Madrid, Gredos, 1983, 9^a ed.)
- 坂東省次「スペイン語再帰動詞の環境範囲について、京都外国語大学研究論叢 20. 1979」
- 興津憲作「イスペイン語と日本語の比較研究II受動態 英知大学論叢 3. 1969」